

2019.9. 25 <計2枚>

京都大学記者クラブ加盟社 各位

立命館大学広報課

## 食と政治の密接な関わりを考える

2019年度 国際言語文化研究所 連続講座「食と政治 ー胃袋から支配する」

日程:2019年10月4日(金)・17日(木)・18日(金)・25日(金)

会場:立命館大学衣笠キャンパス 平井嘉一郎記念図書館 カンファレンスルーム

国際言語文化研究所は、衣笠キャンパスで、全4回の連続講座「食と政治 ー胃袋から支配する」を開催いたします。

「政治は食わせてなんぼ」と言ったのは菅原文太さんですが、これまで自分の信念から「食わない」選択をする人たちもいました。生きることの根幹には「食」があり、誰もが関心のある「食」は、本来ならば人生同様に「よろこばしき」ものであるはずですが、人々は常に多くのファクターに翻弄されてきました。その一番大きな要因は「政治」であると考えています。「政治」においては、「食」はひとつの支配のための道具となり、それを通じて人々に従属を強いるものとなります。

本連続講座では、「食」と「政治」のあまり「よろこばしくない」関係を探ります。多方面から専門家をお招きし、海外の事例も交えた議論を通して、本質的にありがたく、またよろこばしい「食」を見直す機会とします。

### 記

日時：2019年10月4日(金)・17日(木)・18日(金)・25日(金)

17:00~19:00(開場16:30) ※10/17(木)のみ17:30~19:30(開場17:00)

会場：立命館大学衣笠キャンパス 平井嘉一郎記念図書館 カンファレンスルーム

参加費：無料・事前予約不要

内容：別紙をご覧ください。

主催：立命館大学国際言語文化研究所

協力：立命館大学食総合研究センター

以上

### ●取材・内容についてのお問い合わせ先

立命館大学国際言語文化研究所 担当:安川・石井

TEL.075-465-8164

<http://www.ritsumeai.ac.jp/research/iilcs/>

**【第1回】10月4日(金)「食と全体主義」**

全体主義とはなにか、このところアクチュアリティを増す問いであるが、その原型であるイタリアとドイツの例における農業政策および食糧政策、さらには模範的な食習慣をひもとく。すると、支配の確立あるいは合意の形成に驚くほど関わることに気付く。

報告1:「ナチスのキッチン:ヒトラーの食糧戦争」 藤原 辰史(京都大学)

報告2:「パンと祖国:ファシズムの小麦戦争」 新谷 崇(茨城大学)

コメント:山手 昌樹(上智大学)

司会:土肥 秀行(立命館大学)

**【第2回】10月17日(木)「食と甘さの世界変容」**

17~18世紀ヨーロッパのショ糖需要は、アフリカ、新世界を巻き込んだ世界貿易ネットワークと強制的な人口移動、そして組織化された労働力搾取によって連鎖的に増大していった。第2回は、甘さの誘惑がもたらした世界変容の諸相を旧世界・新世界側から見直す。

報告1:「歴史における『甘み』の役割」 南 直人(立命館大学)

報告2:「砂糖菓子の情念」 橋本 周子(滋賀県立大学)

報告3:「砂糖の秩序、タバコのカオス」 安保 寛尚(立命館大学)

コメント:西 成彦(立命館大学)

司会:中村 仁美(立命館大学)

**【第3回】10月18日(金)「食と言説」**

ある食品が流通し消費されていく歴史や過程には、様々な言説が生みだされる。健康や繁栄、美、さらには民族やナショナルアイデンティティまで。第3回は、ツバメの巣やヨーグルトを事例に食と言説との関わりについて考えたい。

報告1:「森の錬金術ーツバメの巣の生産から消費まで」 佐久間 香子(立命館大学)

報告2:「伝統食品からグローバルな健康食品までーブルガリアのヨーグルトをめぐる言説空間」

マリア・ヨトヴァ(立命館大学)

コメント:古川 勇氣(立命館大学)

司会:小川 さやか(立命館大学)

**【第4回】10月25日(金)「食と支配・抵抗」**

戦時収容所で食はいかに支配の道具となり、権威に抵抗する手段ともなったのか。食品の見た目はいかに政府の規制や企業戦略と消費者団体の抵抗の拮抗の中から生み出されてきたのか。第4回では、20世紀半ばの米国の事例を通して、食と支配・抵抗の関係を探る。

報告1:「日系アメリカ人戦時収容所における食と支配」 和泉 真澄(同志社大学)

報告2:「味覚と視覚の境界ー1960年代米国における食品規制と企業戦略ー」

久野 愛(京都大学)

司会:坂下 史子(立命館大学)